農家のヨメ?!通信 VOL.10

農家に嫁いで感じた
「？」や「！」をお届けします。
農家の暮らしは、
かなりオモシロイ！

ヨメ?!
十勝で100年続く
とやま農場の長男のヨメ。
帯広市内の印刷会社に勤める。
2018年3月に第1子を出産。

おかあのこと

今回は我が家の大黒柱、今年めでたく還暦を迎えた義理の母のことである。結婚当初は、ドギマギしながらも「おかあさん」と小さな声で呼んでいたのだが、息子4人が言う「おかあ！」という威勢のいい声の中で過ごすうちに、今では私も親しみを込めて「おかあ」と呼ばせてもらっている（時と場所はわきまえつつ）。

知っている人は私以上にご存知だろうが、我が家のおかあは、ハンパな人ではないのである。私たちの披露宴のスピーチではその堂々たる話ぶりに「極妻（極道の妻）」と言わしめたこともある。とにかく何においても「一本筋の通った人」というのが誰もがうなずくおかあの特徴と言えるだろう。

他県から北海道の酪農に憧れ、海を越えてやってきたおかあ。十勝の畑作農家に嫁ぎ、公私ともにパートナーとして「おとう」と歩んだ20年。その間に授かった4人の息子たち。おかあの自分史も兼ねたおとうの追悼集「土に生まれ、土に生き、土に帰る」は、農業への情熱と夫への愛に満ちていて涙なしに読むことは出来ない。40代も半ばで最愛の伴侶をなくし、それでも自分が農業を続けていこうと、私なら果たして思えるだろうかと、いつも考える。答えは限りなくノーに近い。追悼集の中で、そうした悩む気持ちを後押ししてくれたのは産地直送で繋がっていた、食べてくれる人の存在が大きかったと書いている。おとうと始めた産地直送。「それまでのトンからグラムへと変化した」作物のこと。特にカボチャはそのためだけにしか栽培していない。いつだったかおかあが「私にとってカボチャは大切な作物なの」と話してくれたことがある。何をどれだけ植えるか、は、農家にとって死活問題である。でも、それを単に収益のことだけで判断することも違う。穫れるか穫れないか、必要であるかないか、土のために良いか悪いか…、様々なことを総合的に判断しなくてはならない。そして、それはきっと未来を想像する力とも似ている気がする。

おかあは4人の息子たちに未来を託して10年間農場主を務めた。その地に足の着いた生き方は、文字通り、この北の大地に這いつくばって手にした、おかあだけにしかない価値だ。だからおかあの言葉には説得力があるし、言葉の裏にある農業への「想い」も感じることができる。

おとうが天に旅立ってから16年目の春。今年も早春の小麦畑と日高山脈が美しい季節がきた。トラクターが動き始めて、土の香りが立ち込める。おかあが農作業着に着替え、畑へ向かう。「心はいつもとうさんと一緒」と笑いながら、広大な敷地に凛と立つ姿がとても好きだ。ここがおかあの生きる場所なんだ、と思う。

春の恵み

今年は例年になく雪が少ないまま、春が来た。北海道の春といえば雪解けと共に顔を出す福寿草やふきのとうだが、今年は雪がなかったので早々に目にすることとなった。ふきのとうはまだ蕾が開ききらないものを採って、まずは天ぷらに。サッと揚げて塩だけで食べるのが格別！ほろ苦い春の味である。たくさん採れば湯がいてふき味噌に。水辺のクレソンやふきも採り放題である。北海道の山菜の代表格と言えばギョウジャニンニク（別名アイヌねぎ）だが、昔はじいちゃんがよく採りに行っていたらしい。「山ごと採っちまったからなあ」というのが口癖だ。（じいちゃんやってくれたな）。北海道に古くから住んでいたアイヌの人たちは狩猟採集民族で、魚や山菜などの食物は山の神様（カムイ）からの恵みだと考えていた。

ふきは根を煎じて赤ん坊に飲ませたり、はしかの薬としても代用されていたそうだ。北海道で暮らすものとして、こうした先人の知恵も知っておきたいと思う。ひとまずは花より団子。ヨモギも採れる季節だなあ。ヨチヨチ歩きの娘と散歩がてら採りに行きたいなあと願う、そんな春である。

なつぞら

NHK朝の連続小説100作目となる「なつぞら」は、十勝が舞台ということで、周辺が賑やかになっている。登場人物は架空だが開拓の歴史が垣間見れ、じいちゃんが話す当時の様子を少なからず知る機会にもなっている。「木の根っこがあちこちにあってな、それを馬で引っ張って…。朝起きたらまずは馬の餌を用意するのが子どもの仕事だった」。開墾には何年何十年という歳月がかかり、それを馬と人の手だけで行うこと。さらに作物を育て収穫して生活を成り立たせようと思うと、さらに何年もかかる。1日という日の短さと、それを積み重ねて今に繋がってきた歴史。じいちゃんの節だらけの手が、その時間の長さと開拓の厳しさを伝えてくれている。

「なつぞら」のテーマは「開拓」だそうで、それは実質的な意味の開拓であり、まだ見ぬ世界を切り拓いていくという意味でもある。じいちゃん世代が開拓したこの土地を、現在の私たちが開拓するとしたら、どんな方法や手段があるだろう？「美しいふるさとの風景をつくる」と燃えた開拓者たちのスピリットを、新しく始まる令和の時代、娘が生きていくこの時代にも受け継ぎ、常にまだ見ぬ未来にワクワクしながら、挑戦し続ける人生でありたい。